

[翻訳]

ひまわり (2)

ジーモン・ヴィーゼンタール

訳： 柴 寄 雅 子*

Die Sonnenblume

Simon Wiesenthal

Japanisch von Masako Shibasaki*

キーワード

ヴィーゼンタール、ホロコースト、ゆるし

*本稿は『大阪国際女子大学紀要』27号ー2（平成14年3月発行）に掲載した拙訳「ひまわり」の続編である。

そうこうするうちに目が薄暗がりに慣れて、白い包帯に黄色いしみが点々と付いているのに気付いた。軟膏か膿に違いない。そのため、すっかり覆われた頭は不気味な感じがする。私はベッドに腰かけたまま釘付けになり、この男から目を離すことができなかった。包帯に付いた黄土色のしみが動きだし、私の目の前で次々に謎めいた新たな形に変わって行くように見えた。

聞きとれないほどの小声で病人が囁いた。「僕はもう長くはありません。死が近いことはわかっています」。

そこで言葉が止まった。先をどう続けるべきか思案しているのだろうか。それとも自分が今言った言葉で、胸が一杯になったのだろうか。私はもっと綿密に彼を観察した。ひどく憔悴し、まるで血をすっかり抜き取られたかのような。シャツ越しに骨が浮き上がっていて、乾き切った皮膚を突き破ろうとしているように見える。

私の心は彼の言葉には動かされなかった。こんな状況で生きることを強いられているため、死に対するあらゆる感情が消えてしまったのだ。死、病気、苦しみは、われわれユダヤ人に絶えず付きまとっているのもはや何のショックも与えなくなっているのである。

*しばさき まさこ：大阪国際大学人間科学部教授〈2002. 6. 28受理〉

まだ二週間もたっていないことだが、東方鉄道での作業で、私はセメント袋を貯蔵している倉庫へ入らなければならないことがあった。苦しうなうめき声が聞こえたので行ってみると、セメント袋の間で囚人が横たわっていた。「一体どうしたんだ。なぜうめいているんだ」と私は尋ねた。

「もうお仕舞だ」と彼は絞り出すように言った。「僕は死ぬんだ。もう手の施しようがない。僕が死んでも、可哀相とは思ってくれる人はいない」。さらに彼はあきらめきったように付け加えた。「まだ二十二なのに」。

私はすぐさま倉庫から走りだして、囚人医を探し出した。医者は肩をすくめて、そっぽを向いた。

「今日ここで二百人が働いているが、そのうち六人は死にかけてるんだ」。医者は、瀕死の囚人がどこにいるのかさえ聞こうとしなかった。

「助けに行かないのか」と私は彼を咎めた。

「どうせ何もしてやれないさ」。

「でも君は医者だから、僕よりは自由に動けるし、いなくなって看守に何か言われても、うまく言い訳できるじゃないか。あんなに独りぼっちで見捨てられたまま死ぬなんて、ひどいよ。せめて最期ぐらい見取ってやってくれよ」。

「わかった、わかったよ」と医者は言ったが、助けに行かないことは僕には分かっていた。彼にしても、死に対する感覚を失ってしまっていたのだ。

夕方の点呼のとき、最前列の脇に六つの遺体が並べられていた。何の注釈もなく、それらも勘定に入れられた。総数はぴったり合っていた。

そのケガ人は言った。「刻一刻、多数の人が亡くなっていることは分かっています。今では死はどこにでもあって、珍しくもなければ異常なことでもありません。もうじき自分が死ぬのは仕方ないと思っています。でも、その前に辛い経験のことを話しておきたいんです。そうでないと安らかに死ねません」。

彼は大きな息をついた。頭の包帯を通して彼にじっと見つめられているような不気味な感じがする。もしかしたら黄色いしみを通して見ているのかもしれない。ちょうど目のところにしみがあるわけではないのだが、それでも観察されているような感じがして、目をそちらへ向けることができなかった。

「看護婦さんから、中庭でユダヤ人の囚人が働いていると聞いたんです。その看護婦さんはさっき母の手紙を持って来て……読んでくれて……それからまた出て行きました。僕がここに来てからもう三ヵ月になります。それである決心をしました……長い間、よく考えたうえでのことです……。看護婦さんが戻ってきたとき、僕は手を貸してほしいとお願いしました。『ユダヤ人の囚人を見かけたら、僕の所に来るよう頼んでください。ただし誰にも気付かれないよう、気をつけてください』と言ったのです。僕がなぜそんなことを頼むのか、看護婦さんはまったく想像できなかったでしょう。彼女は何の返事もしないうちに行ってしまった。

看護婦さんはそんな危険を冒したりないだろうと、もう望みを失っていたんですが、さっ

き戻ってきて、『外にユダヤ人が一人、本当にいますよ』と囁いてくれました。まるで死に行く者の最後の望みをかなえているみたいな言い方でした。実際、彼女は僕の状態を知っています。死にかけているのは僕も分かっています。治る見込みのない者は見放され、一人で死んでゆくものです。たぶん他の人の邪魔をしてはいけないのでしょう」。

私の横にいるこの男は、いったい何者なのだろう。私に話すべきどんな一大事があるのか。もしかしたら彼はドイツ人を装っていたユダヤ人で、死を前にしてユダヤ人に会いたいのかもしれない。もう何も恐れることはないのだから。ゲッターで、また後には収容所でも聞いた噂だが、「アーリア人」に見えるので、書類をごまかして国防軍に紛れ込んだり、それどころかSSに潜り込んだユダヤ人もドイツにはいるらしい。彼らはそんな風にして生き延びようとしたのだ。この男も、そうしたユダヤ人なのだろうか。それともユダヤ人とドイツ人の間に生まれた混血か。

彼が少し動いたとき、片方の手の下にあった手紙がベッドから落ちたのに気付いた。私は身をかがめ、手紙をまた毛布の上に置いた。

彼の手には触れなかったし、私の動きは見えなかったはずだが、にもかかわらず彼は反応を示した。

「ありがとうございます。それは母からの手紙なんです」。そう彼は呟いたのである。

じっと見られているような感じがまたした。

彼は手紙を手探りでさがし当て、引き寄せた。まるで手紙に触れることによって、再び少しでも活力と勇気を見いだそうとしているかのようだ。

私は自分の母のことを考えずにはいられなかった。母が私に手紙を書くことはもう決してないだろう。五週間前の家屋明け渡しで、ゲッターから連れて行かれたのだ。何度も強奪された後、まだわが家に残っていた唯一のものが金時計だった。連行されかけたとき、これを相手にやれば逃がしてもらえるかと思い、私は母にこっそり金時計を手渡した。居住を保証する証明書を持っていた隣人が、後でその時計の行方を教えてくれた。母は連行しにやって来たウクライナの警官に時計をやった。警官はそれで一旦は立ち去ってくれたのだが、数分もたたないうちに引き返ってきて母を連れ去ったのだ。広場で他の人たちといっしょに母はトラックの到着を待った。その行き先からは、もはや手紙など書けはしない……。

時が止まったかのようだ。

「僕はカールといいます。志願してSSに入りました。もちろん、あなたはSSと聞くと……」。

言葉が途切れた。彼の喉は乾燥しているらしく、ひきつるようにして何か塊を飲み込もうとしている。彼がドイツの軍服を着てカモフラージュしているユダヤ人か混血だとは、もう思わない。そもそも、そんなことをどうして考え付いたりしたのだろう。まあ、最近は何でもありというところだが。

「僕はあなたに恐ろしいこと……残酷なことを話さなければなりません。一年前のことです。もう一年もたったのか」。

最後の言葉は、きっと自分自身に語りかけていたのだろう。

「そう、一年です」と彼は続けた。「一年前、僕は……罪を犯しました。とにかく誰かにその話をしなくちゃならないんです。そうすれば楽になるかもしれない」。

彼の手は私の手をしっかりと握りしめている。罪という言葉を知り、私がほとんど無意識のうちに自分の手を引っ込めようとする、彼の指がからみついてきたのだ。どこからこんな力が出てくるのだろうか。それとも、彼の手を振りほどけないほど、私が弱っているのだろうか。

「僕はあなたに恐ろしいことを話さなければなりません。『あなたに』というのは……あなたがユダヤ人だからです」。

私がまだ知らないような恐ろしいことがあるだろうか。病的な頭脳が考案できるような冷酷残忍な行為なら、みな知っている。そうしたことを私は身をもって体験しなければならなかった。収容所で見たこともある。夜、収容所で仲間が震えながら話すことと比べて、このケガ人の話の方がひどいということはまずないだろう。

私は彼の話をして聞きたいとは思わなかった。

私の居場所を「アスカリ」に報告するよう、あの看護婦が気を回してくれればいいのか。もしかしたら私が逃亡したと思って、捜索が始まっているかもしれない……。

そう思うと落ち着かない。ドアの外で何人かの声がする。あの看護婦の声も聞こえたので、安心した。

「自分が背負っている罪の重さに気付くまでに、少々時間がかかりました」。

私は包帯を巻いた彼の頭をじっと見つめた。どんな罪を告白しようとしているのかは、まだ見当がつかなかった。だが彼が死ねば、その墓にはひまわりが植えられることは分かっていた。もうすでにこの部屋の窓に向かって咲いているひまわりが、目にありありと浮かんできた。死者が横たわるこの部屋に、太陽は窓を通して光を送りこんでいた。

なぜ早々とひまわりが出てきたのだろうか。この花は墓地まで彼に付いて行き、墓の横に立ち、そうして命との繋がりを作り出すことだろう。

だから彼がうらやましいのだ。

さらにうらやましいことに、彼は死の間際にあって、故郷で自分の身を案じてくれている母親に思いを馳せることもできる。

「僕は生まれつきの人殺しじゃありません。人殺しにさせられてしまったんです……」。彼は苦しげに息を継いだ。

「僕はシュトゥットガルトの出身で、まだ二十一歳。死ぬには早すぎます。まだ大して人生を味わってもないのに……」。

たしかに早すぎると私も思った。しかし誰がそんなことを問題にするだろう。ナチスは、ユダヤ人の子どもたちがもう幾分なりとも人生を味わったかと、尋ねたか。子どもたちは死ぬのが早すぎはしないかと、尋ねたか。かつてそんなことを私に訊いてくれた人がいたのだろうか。今、訊いてくれる人がいるだろうか。

私の考えを見通したかのように、彼は言った。「あなたがお考えになっていることは、よくわかります。でもやっぱり、僕はまだ若すぎると言っているいいんじゃないでしょうか……」。

父は工場の主任で、筋金入りの社会民主主義者でした。1933年以後、父は何かと困るよ

うになりました。まあ、多くの人も同様でしたが。母は僕を宗教的に育てました。実際、僕はミサの侍者までやったほどで、司祭にすっかり気に入られていました。司祭は僕が将来、神学を学ぶことを望んでいたんです。でも、その後、何もかも変わってしまった。僕はヒトラー・ユーゲントに入り、当然、教会との縁も切りました。さもないと仲間からかわれていたでしょう。母はとても悲しみましたが、結局もう小言は言わなくなりました。僕は一人っ子なものですから。父はずっと黙っていました。

父は僕が家で聞いたことをヒトラー・ユーゲントでしゃべるんじゃないかと、恐れていました……。僕らは地区指導者から、自分の責務をどこであれ果たすよう求められていました……家ででもです。たとえ陰口を聞いただけでも、指導者に報告することになっていました。その通り実行した者も少なくありません。僕はやりませんでした。それでも両親は恐れていました。僕が近づくと、互いに話すのをやめるんです。信じてもらえないのが嫌でしたけど、あの頃はじっくり考える暇はありませんでした。残念ながら。

ヒトラー・ユーゲントで僕は新しい友達や仲間を見つけ、毎日が充実していました。放課後、僕らのクラスのほとんどが、すぐにヒトラー・ユーゲントのホームか運動場に行きました。父は僕とはめったに口を利かなくなり、たまに僕と話すときはとても用心していました。当時の父の心に何が重くのしかかっていたのか、今ならわかります。父が安楽椅子に座り、一言も発することなく何時間も物思いにふけているのを、よく見かけました……。

戦争が始まったとき、僕は志願しました。もちろんSSにです。僕だけじゃなくて、ヒトラー・ユーゲントの仲間の半分近くが、自ら進んで出征しました。ろくに考えもせず、まるでダンスか遠足に参加するような感じで戦地に向かったんです。別れのとき、母は泣いていました。ドアを開めたとき、背後で父がこう言うのが聞こえました。『やつらは今度は子どもまでも奪ってしまうのか。先は知れているのに』。

父の言葉を聞いて、当時の僕はすごくカッとしたので、できれば引き返して『父さんは今という時代がわかってないんだ』と言ってやりたかった。でも、やめておきました。それでなくても辛い別れを、そんな修羅場で余計にひどいものにはしたくなかったからです。

あのとき母に向かって言ったその言葉が、僕にとっては父の最後の言葉になったようなものでした。母が僕に書き送ってくれる手紙に、父が何か一言書き添えることはほとんどありませんでした。母はたいがい、お父さんはまだ工場にいるけど、すぐに手紙を投函したいからなどと、父を弁護していました。でもそんなのは言い訳だとわかっていました。

彼はそこで一休みし、ナイトテーブルに置かれたコップを手探りで探した。見えていないはずなのに、彼はすぐにコップを見つけた。一口飲んでからコップをまた元の場所にしっかりと戻した。私が手を貸す隙もなかった。本当に彼は口で言うほど具合が悪いのだろうか。

「最初、僕らは演習場の訓練用キャンプ地に行きました。そこでポーランド出兵のラジオ放送を夢中になって聞き、新聞の報道をむさぼり読んでいました。僕らはもう要らなくなるんじゃないかと心配したぐらいです。絶対に何か決定的な体験をして、世界を見て、それをみんなに話せるようになりたかった……。伯父はいつもロシアの戦争について、敵をマズーレン湖沼地方までどうやって追い詰めたかとか、いつもわくわくする話をしてく

れました。そんなことを僕も体験したかったんです……」。

私はいても立ってもいられなくなり、自分の手を彼の手から振りほどこうとした。もう出て行きたかった。しかし彼は手も使って話しかけているようだ。掴む力が強くなり、出て行ってくれるなど私に言っている。もしかしたら彼の手は、目の代わりをしているのかもしれない。目がなくても全然困っているようには見えないからだ。包帯の下に目があるのかどうかも疑問だ。

私は部屋の中を見回した。それから視線を窓に移した。陽の当たっている中庭正面の一部が目に入る。そこには屋根の影の線が斜めに走り、中間段階のない明暗二つの境界をくっきりと示していた。

彼は占領されたポーランドへの出動の話をし始め、ある村のことに触れた。ライヒスホーフのことだろうか。そのことは訊かないでおこう。

なぜこんなに長々とした前置きがあるのだろう。私にしてほしいことを、さっさと言えばよいのに。私を御大層に扱う必要などないはずだ。

彼の手が震え始めた。それを利用して、私は手をさっと引いた。だが、彼は私の手をすぐまた掴んで、囁いた。「お願いします」。彼はこれから話すことに耐えられるよう、自分自身を——それとも私を——力づけたいのだろうか。

「それから、それからあの恐ろしいことが起こりました……でもその前に、もう少し僕自身のことについて話さなければなりません」。

彼は私がそわそわしているのを感じとったようだ。何度もドアの方に私が目をやるのに気づいたのだろうか。彼は言った。

「誰も入っては来ません。看護婦さんが外で見張っていると約束してくれましたから。

同級生のハインツとはポーランドでも一緒だったんですが、ハインツはいつも僕のことを夢想家と呼んでいました。理由はよくわかりません。僕がいつも快活で幸せそうだったからかもしれません。あの事件が起きるまでは、快活で幸せだったんです……。ハインツが今ここで僕の話聞いてなくてよかった。母にも僕がしでかしたことを知ってほしくはありません。『いい子』のイメージを壊したくないんです。母は僕のことをいつも『いい子』と呼んでいました。母の望みの通り、いつまでも僕のことをいい子と思わせてあげたいんです。

故郷では、母が近所の人みんなに僕の手紙を読み聞かせています。そして近所の……人たちは、僕が総統と祖国のために闘って名誉の負傷をしたと言っています。……この決まり文句は御存知でしょう……」。

彼の声は苦々しい調子を帯びてきた。まるで自分自身を傷つけ痛い目に遭わせようとしているかのようだった。

「母の思い出の中では、僕は依然として快活で屈託のない青年なんです。悪ふざけばかりしてるようなね。どれほどいたずらをしたことか……。訓練期間中、室長の目には冗談が過ぎると映ったために、僕は一度、営菓送りになりかけたほどでした……」。

彼は青年時代と仲間について語った。私もいたずらを企むことのできた年月を思い出していた。友人——プラハでの同僚——が目には浮かぶ。私たちがあれこれふざけたものだ。

私たちも若く、まだ前途洋洋としていたのである。

しかし、それもずいぶん昔の話で、今の現実からはほど遠い。そもそも私と彼の青年時代に、どんな共通点があるというのだろうか。私と彼とは別の世界から来たのではないか。私の世界の友人はどこにいるのか。まだ収容所にいるか、さもなくば名もない共同墓穴の中だろう。彼の友人はどこにいるのか。生きているか、さもなくば少なくとも名前の書かれた十字架があり、墓の横ではひまわりが見守ってくれているのだ。

なぜユダヤ人の私が死にゆく兵士の告解を聞かなければならないのか、疑問に思う。彼が本当にキリスト教の信仰を再び見出したのなら、司祭を呼べばいいだろう。司祭なら、死に行く彼を助けられるかもしれない。だが大体この野戦病院に、聖職者はいるのだろうか。おそらく、いないだろう。ユダヤ人ならまだいるというわけか。

今わの際、私は誰に懺悔できるだろう。そもそも告白するようなことがあるだろうか。いずれにせよ、この若者のようにたっぶり時間をかけることはできはしまい。懺悔をしたいとも思わない。すでに亡くなった多くの人々と同様、私の最期も安らかではないだろう。もしかしたら不意打ちを食らうかもしれない。もしかしたら心構えすらできないうちに弾に当たるかもしれない。

彼はなおも青年時代について、まるで朗読しているかのように話し続けている。こんなことのために彼は私を呼びつけたのだろうか。彼にやらされているのは、私自身の青年時代を思い出すことだけだ。だが、もうそのことは考えたくない。あまりに遠く離れているので、非現実的に思える。私はずっとこの収容所で暮らしてきたような気がする。人間の姿をした獣に虐待されるためだけに生まれてきたというわけだ。下等人間である私に向かって、奴らは人種コンプレックスを発散したいのだ。昔を思い出せば気弱になってしまう。私は気丈でいたいのだ。この闇の時代では、強い人間だけが生き残るチャンスがある。そして私たちよりはるかに優秀だと思い込んでいる連中の末路を見ることができると。奴らは戦勝報告を誇示し、戦闘に勝ったと度外れた歓喜の声を上げ、途方もなく思い上がっているけれども、いつか世界が奴らの蛮行の仕返しをするだろうと、私はまだ信じていた。ナチスが今のユダヤ人のように、頭をうなだれる日が来るはずだ。

もうこれ以上、彼の話聞くことには全身が抵抗している。私はここから立ち去りたかった。

瀕死の若者は感づいたに違いない。手紙を放して私の腕をつかもうとしたからだ。その動きが余りに痛々しかったので、私は急に彼のことが可哀想になった。私は出て行きたかったが、留まることにした。急いで彼は話を続けた。

「去年の春、何かが計画されていることに僕は気づきました。偉大なことを行う心の準備をするよう、以前にも増して頻繁に言われるようになったからです。各人が任務を果たし、『ピシッ』としなければならぬ、今は感傷に耽っている時ではない、総統が必要なのは真の男子だ、と言われました。

あの頃の僕は、そんな檄にすっかり舞い上がっていました。

それからロシアとの戦いが始まり、出動の直前にラジオでヒムラーの演説を聞きました。究極の勝利、総統の使命……下等人間の駆逐……そんな話です……。僕はユダヤ人とボ

ルシェヴィキについて書かれた数々の本にショックを受け、『突撃者』{1923年から1945年までニュルンベルクで発刊された、ナチスの反ユダヤ主義的な週刊誌}をむさぼり読みました。中には『突撃者』に載ったカリカチュアをベッドの上に貼っている者もいました。僕はいやでしたが。夜になると食堂でビールを片手に、ドイツの未来について熱烈に語り合いました。ロシア戦はポーランドでの闘いと同様、電撃戦でしかなく、さらに東方へと躍進を続けるんだと僕らは確信していました。ドイツ国民には生活圏が必要でしたから。

彼は疲れきり、一瞬、語るのをやめた。

「今、僕の生活圏がどうなっているかは御覧の通りです」。

彼は自分を哀れんでいた。その言葉には苦渋と諦念が滲んでいる。

窓の外を見ると、光と影の境界はもう正面内側の他の窓へと移っていた。太陽も一段と高くなっている。窓が一つ開き、太陽の光を彼に照り返したかと思うと、すぐにまた閉まった。その一瞬のきらめきは、鏡を使った信号のように思えてならなかった。

最近、私たちは何にでも「しるし」を見出すようになっていた。神秘思想と迷信が花盛りの時代である。神秘主義にどっぷり浸かった話を収容所で何度、仲間から聞かされたことか。ただ私たちにとって一切が非現実的で幻影のようだったのも事実で、この世には神秘的な存在が満ち溢れていた。神様が休暇中なものだから、その隙に他の者たちが取って代わり、私たちにしるしや予兆を与えていたのだ。まともな時代なら、超自然的な力を信じる人など笑い飛ばされてしまうだろう。だが今や私たちは超自然的な力にひたすら頼っていた。予言者やカード占い師が口にするちょっとした言葉でも、必死になって聞こうとした。事態が改善する希望を抱かせてくれさえすれば、まったく馬鹿げた予兆にしがみついてもよくあった。ここではユダヤ人の永遠の楽観主義があらゆる理性を閉め出していたのである。もっとも、いずれにせよ理性は、この時代では場違いの存在だった。このナチスの世界に理性的で論理的なものが何かあったらだろうか。おぞましく惨めな現実からひたすら逃れるために、人々は空想の世界に夢中になっていた。そんな時に理性などがあっては、邪魔なだけだろう。私たちは夢の中へ逃げ込み、その夢から覚めないためなら何でもやっていた。

私は一瞬、自分がどこにいるのかを忘れていた。ブーンという音が聞こえる。ハエだ。おそらく膿の臭いに引きつけられたのだろう。けが人の頭の周りでぶんぶん音をたてている。彼は目が見えないのだから、私が手でハエを追ったのも見えなかったはずだ。だが気配で感じただけに違いない。

「ありがとうございます」と彼は囁いた。そう言われて初めて気づいた。無力な下等人間である私が、同じく無力な支配者人間を安堵させるようなことを、よく考えもせず当然のように行ったのだ。

「六月末に僕らは集められて突撃隊となり、トラックで前線に送られました。陸路を通じてです。見渡す限り小麦畑が延々と広がっていました。ヒトラーは収穫を取り入れられるように、わざとこの時期にロシア出兵を始めたんだと、僕らの隊長は言いました。僕らはその通りだと思っていました。まったくきりがないような進軍の途中で、道端には死んだロシア人、焼け焦げた戦車、放置されたトラック、馬の死骸がありました。負傷したロシ

ア人もいましたが、助ける人もなく、放ったらかされていました。彼らの叫びやうめき声が僕らの全行程に付いてまわりました。

仲間の一人が、負傷者に唾を吐きかけたので、なんでそんなことをするのか問い詰めました。返ってきた答えは、僕らの上官が使う決まり文句で、『ロシア人に同情はいらない』でした」。

彼の言葉は冷やかな軍事報告のように聞こえた。その話し方はまるで従軍記者の文章のようで、彼の声には自分も参戦しているという熱気がまったくこもっていなかった。新聞で使うような無味乾燥な決まり文句もよく出てきた。

「僕らはとうとうウクライナのある村に着きました。そこで初めて敵と対面したのです。空き家になった農家にロシア人が立てこもっていたので、そこを銃撃しました。僕たちが襲撃したときは、もう二、三人の負傷者しか残っていませんでした。僕は気にも留めませんでした。つまり僕は、負傷者のことなど気かけなかったのです。でも隊長は——隊長はそのうちの二人に銃でとどめを刺しました。

この野戦病院に来てから、こうした一つ一つの事柄を何度も思い出して、すべてをまたもう一度体験しています。それもずっと正確で鮮明なんです……今なら時間があるからでしょうが。

戦闘は残酷でした。耐えきれかねた者も少なくありません。それに気づいた大尉は、怒鳴りつけました。『ロシア人がわが兵士たちに行っていることが、これと違うと思っているのか。あいつらが同胞をどう扱っているかを見るだけで、すぐわかる。我々が出くわした監獄は殺された人でいっぱいだったではないか。ついて来れない囚人は、のきなみあっさり撃ち殺していくんだ。歴史を創るように選ばれた者は、そんなつまらぬことにかまっちはおれん』。

ある晩、仲間の一人が僕を脇へ連れて行き、ゾッとしたと話し始めました。でも、すぐにまた黙り込んでしまいました。僕が信用できなかったからです」。

よく似た話はあるものだ。二年前、私がオデッサにいたとき、ある人から聞いたのだが、苦情を訴えようと思ったら、自分の親友すら信じられなくなったというのである。恐怖は友情を引き裂き、不信の種をまく。それはいずこも同じなのだ。

「僕らはさらに歴史を創って行きました。来る日も来る日も戦勝報告を聞き、もうじき戦争は終わると何度も聞かされました。ヒトラーがこう言ったとかヒムラーが……。僕にとってヒムラーは本当にもうどうでもいいんです……」。

彼は深い息をつき、そして大きく吸い込んだ。背後で音がしたので、私は振り返った。気がつかなかったが、ドアが開いていたのだ。しかし彼には聞こえていた。

「看護婦さん、お願いします……」。

「いいんですよ、ただちょっと様子が知りたかったですから」。

彼女はまたドアを閉めた。

「ある暑い夏の日、僕たちはドニエプロベトロフスクへ行きました。あちこちに車や大砲が放置されていて、多くはまだ無傷でした。ロシア軍はずいぶん慌てて撤退したのがわかりました。家は焼かれ、道路は即席に造られたバリケードで封鎖されていましたが、そ

この防御に当たっている人は一人もいませんでした。わが軍の工兵がバリケードを除去しました。市民の中にも死者が出ていました。歩道に女の人が一人、大の字に寝ていて、そのそばに小さな子どもが二人、しゃがんで泣いていました。

休息の命令を受けて、僕らは武器を建物の外壁に立てかけ、地面に座り込んでタバコを吸っていました。すると突然、爆音がしました。空を見上げても、飛行機は見えません。砂埃が上がるのを見て初めて気づいたんですが、そう遠くないところで一区画の家全部が吹き飛んでいたのです。まもなく救急車が何台も走って行きました。爆発のせいで、たくさんの方の死者と負傷者が出ました。

ロシア軍は退却する際に、相当数の区画の家に地雷を仕掛けていました。家に足を一歩踏み入れると、すぐに吹き飛ばされます。この戦略をロシア軍はフィンランド軍から学んだんだと、仲間の一人は言っていました。僕は休息中でよかったと思いました。またもや難を免れたからです。

急に僕らの前にジープが止まり、大尉が降りてきて、僕らの隊長を呼びつけました。それからトラックが二、三台やって来て、町の別の場所へ連れて行かれました。そこも、殺伐としている点ではまったく同じでした。

大きな広場で降ろされた僕らは、あたりを見回しました。広場の反対側では、ひしめき合っている一団が厳重に監視されています。最初、戦闘地から連れてこられた一般市民だろうと思ったんですけど、野火のように噂が部隊に広がりました。「あれはユダヤ人だ」というのです。それまで僕はあまりたくさんの方のユダヤ人を見たことがありませんでした。故郷には以前、何人かいましたが、ヒトラーが権力を握ると大半はよそへ移って行きました。残ったわずかのユダヤ人も、その後、突然いなくなってしまうました。ゲットーへ連れて行かれたと人々は言っていますが、じきにユダヤ人のことなど忘れられてしまいました。ただ母が一度、うちのかかりつけのお医者さんのことを話していました。このユダヤ人のお医者さんがいなくなったことを、母はとても悲しがっていたんです。このお医者さんを完全に信用していたので、母は彼に書いてもらった処方箋をみんな大事にしまっていました。でも、ある日、薬局の人から言われたんです。『これからは別の医者処方箋を書いてもらってください。ユダヤ人の医者処方箋には、もう薬を渡してはいけないことになったんでね』。母はとても憤慨していましたが、父はただ僕を見つめて、何も言いませんでした。

ユダヤ人について新聞が書いていたことを、あなたにお話しする必要はないでしょう。プロパガンダの内容とは違うことをあえて言う人は、ほとんどいません。後になってからポーランドで見たユダヤ人は、シュトゥットガルトのユダヤ人とは全然違っていました。

デビカの演習場でも、二人のユダヤ人が働いていました。僕はよく食べ物をごっそり手渡してやっていました。一度、隊長に見つかってから、別の手を考えました。ユダヤ人は僕らの宿舎の掃除をしなければならぬんだから、机の上に何か食べれる物を置いておくようにしたんです。

それ以外にユダヤ人について知っていることといえば、拡声器を通して聞かされたこととか、読まされたことだけです。

さんざん聞かされました。ユダヤ人こそ我々のあらゆる不幸の元凶だ、ユダヤ人は我々を抑えつけようとしている。戦争も貧困も飢餓も失業もユダヤ人のせいだ……」。同じことの繰り返しだ。悪いのはユダヤ人であり、ユダヤ人は悪いと認めないのは、粹からはみ出した自分勝手な奴だから、処罰を受けなければならないというわけだ。

ユダヤ人が悪いとされるのは、そう望む連中がいるからで、さもないと「邪悪なユダヤ人」のイメージに依存したイデオロギーの主要部分が崩れてしまうからだ。

この瀕死の男がユダヤ人について語るとき、声の調子が暖かくなることに私は気づいた。SS隊員のそんな声は聞いたことがなかった。彼は他の隊員とは別で、ましなのだろうか。それとも、SS隊員でも死ぬ前になると声の響きが変わるのか。

「それから命令が届きました。僕たちはひしめき合っているユダヤ人たちの所へ行きました。百五十人か二百人ほどでしょうか。中には子どもがたくさんいて、おずおずとした目で僕らを見つめていました。涙を流している者はほとんどいません。乳児を抱えている母親もいます。若い男はめったになくて、その代わり女性と老人が大勢いました。

近づくと、彼らの目の表情がよく分かりました。それは恐怖、筆舌に尽くしがたい恐怖です。彼らは死ぬほど恐れていました。どうやら身に迫る危険を知っていたようです……。

トラックが一台、ガソリントラックを持ってきました。僕らのうちの数人が命令を受けて、そのタンクを下ろして建物の入り口へ運び込みました。ユダヤ人の中で力のありそうな者は、階上へタンクを運び仕事をさせられていました。彼らは言われるがまま、うつろな表情でロボットのようにやっていました。

それから、僕らはユダヤ人を建物の中へと追い立て始めました。急にムチを取り出した隊長もいます。ぐずぐずするユダヤ人がいたら、それで急がせるんです。罵ったり蹴飛ばしたりも散々しました。建物はそれほど大きくはなく、三階しかありません。どうやら全員が入りきること、わかりませんでした。二、三分後にはユダヤ人は一人も通りに残っていませんでした」。

彼は黙ったが、私の方は心臓の鼓動が激しくなっている。

私にはその情景がありありと目に浮かぶ。言わずと知れた光景だ。ガソリントラックといっしょに建物の中に追い立てられた人々の中に、私もいたかもしれない。狭苦しい建物の中へぎゅうぎゅうに押し込められ、涙を流して嘆く人々のあり様が、手にとるように感じられる。彼らはこれから何をされるのか予感していた。私もまた予感できた。

「もう一度、ユダヤ人をいっぱい積んだトラックが止まりました。そのユダヤ人たちもさらに建物の中へ追いやられました。そして扉が閉ざされたのです。向かい側には機関銃が据え付けられました」。

そこから先は私にはわかっている。ドイツに占領されてから、もう一年以上になるのだ。似たような話をすでにピアリストクでもプロディでもグロデクでも耳にした。やり方はいつも同じだ。彼はこれ以上、わざわざ話をする必要はない。

私は立ち上がろうとしたが、彼に引き止められた。

「どうか、いてください。まだ話の続きがありますから」。

私はなぜここに留まり続けているのか、わからない。私の心も頭もここから飛び出した

がっているのだが、彼の声には何かそれを押しとどめるものがあった。もしかしたら、SSが私たちに対してどれほど非人間的なことを行ったか、彼の口から彼自身の言葉を、私は聞きたかったのかもしれない。

「準備完了の報告が来たので、僕らは数歩後ろに下がり、手榴弾の安全装置をはずし、号令に応じて開いた窓から手榴弾を建物の中へ投げ込みました。次々に爆発が起こって……何てことだ」。

彼は中断し、ベッドから少し身を起こした。

その全身が震えているのが感じ取れた。

「叫び声が聞こえ、一階から二階さらに三階へと炎がなめ尽くして行くのが見えました……僕らは武器を構えて、この地獄から逃げ出そうとする人がいたら、撃ちました……」。

建物からはすさまじい悲鳴が聞こえてきます。あたり一面、煙がたちこめ、肺を刺激して……」。

彼の手は再びじっとりしてきた。自分がしている話に関心をひどく揺さぶられているようで、そのために汗が吹き出てきたのだろう。最初はまったく気づかなかったが、私は彼に握られていた自分の手を引っ込めた。彼はすぐさま手探りで私の手を見つけ出し、しっかりと握りしめた。

「どうか、お願いします。出て行かないでください。続きをお話しなければならないんです。まだ話さなければならないことがあるんです」と彼はつかえながら言った。

さっきまでは彼がいったい私に何を伝えたいのか不審に思っていたが、これでもうはつきりした。彼が力の限りを尽くしていることが、私には痛いほどよく分かった。彼は全力を振り絞って、私に悲痛な結末まで話してしまおうとしているのである。

「三階の窓の奥に、幼児を抱きかかえた男の人が見えました。彼の服は燃えています。その横には女の人がいて、きっとその子の母親に違いありません。空いているほうの手で男は子どもの目をふさぐと、下の道路へと飛び降りました。数秒後、母親もその後を追いました。他の窓からも数々の火に包まれた人影が落下して行って……僕らは発砲し……ああ！」。

まるでその光景を振り払おうとするかのように、瀕死の男は包帯を巻かれた両目の前に手をやった。

「焼け死ぬよりも窓から飛び降りる方を選んだ人がどれ位いたのかは、わかりません。でもこの一家のことだけは忘れられないんです。特に、あの子のことが。黒い髪と黒い瞳をしていました……」。

彼は疲れきって黙り込んだ。

黒い目の子どもというと、私はエーリのことを思い出す。レンベルクのゲッターにいたまだ六歳の男の子で、問いかけるような大きな目をしていて。その目は、なぜこんなことが起きるのか理解できないと、人に訴えかけていた。

それは決して忘れることのできない目だった。

ゲッターの子どもは早熟だった。自分たちが長くは生きられないことを予感していたよ

うである。数日のうちに数ヶ月分、数ヶ月のうちに数年分の人生を送っていた。子どもがおもちゃを手にしてしまうと、変な感じがした。まるで老人がおもちゃを持っているみたいだったからだ。

エーリに初めて会ったのはいつだろう。最初に話をしたのは、いつだろう。もう覚えていない。

あの子はゲッターの門近くの家に住んでいた。大胆にも門のすぐそばまでやって来るとも時々あった。あの子がユダヤ人の治安警察官と話しているのを一度聞いたことがあり、それで私は名前がエーリだと知っていたのである。

ゲッターの門に近づく度胸のある子は、そういなかった。エーリには要領が分っていた。本能が理性の代わりをしていたのだ。「エーリ」はエリアスの愛称だろう。あるいは学校で習ったように、エリヤの愛称かもしれない。エリヤは預言者だ。その名を聞くと、私自身がまだ子どもだった頃を思い出す。

過ぎ越しの祭りのセデルと呼ばれる晩餐では、他の食器の間に、装飾をほどこした大きな葡萄酒の杯がテーブルに置かれていて、誰もそれに触ってはならなかった。その葡萄酒はエリヤのものと決まっていた。ある特定の祈りの最中に、私たち子どものうちの一人が扉を開けに行かされた。預言者エリヤが部屋に入り、葡萄酒を飲むとされていたのである。私たち子どもは奇跡を信じ、目を見開いて扉のほうを見つめていた。もちろん、誰の姿も見ることではできなかった。

祖母は私に、預言者は本当に杯から飲むんだよと何度も断言した。私が好奇心から杯を覗き込み、それがまだなみなみとしているのを見て取ると、祖母は言った。「預言者は涙一粒分ぐらいしか飲まないんだよ」。

祖母はなぜそう言ったのだろうか。私たちが預言者エリヤに差し出せるのは、涙一粒しかなかったのだろうか。

エジプト脱出以来、数え切れないほどの世代を通じて、私たちはこの歴史的事件を記念して過ぎ越しの祭を祝ってきた。そして同じだけの期間、エリヤのために葡萄酒の杯を用意するしきたりを守ってきたのである。

私たち子どもにとって、エリヤは守護者と考えられていた。私たちの想像の中で、エリヤはさまざま姿をとった。祖母の話によると、エリヤが人に素性を明かすことはめったにない。エリヤは農夫や商人や乞食として現れることがあり、また子どもの姿をとることもあるという。私たちは守護していただく御礼として、祝宴の際に一番美しい杯に極上の葡萄酒を注いで捧げるのだが、エリヤは涙一粒分だけしか飲まないというのである。

ゲッターの子どものエーリは、数々の「子ども狩り」をまるで奇跡のように生き延びた。子どもは「働きもせず役に立たないのに飯だけ食う奴」とみなされていた。大人は日中、ゲッターの外で働いていた。たいていその隙を狙ってSSは子どもたちを捕まえにきた。しかし毎度のように、追っ手をかわす子どもが何人かいたのである。

子どもたちは隠れ方を身に付けていた。親は子どものために、床下や暖炉や二重壁のダンスに逃げ込める場所を作ってやっていた。子どもは小さいながら、時とともに危険に対する第六感のようなものを発達させていった。

しかし次第にSSも、きわめて巧妙な隠れ場所でも見つけるようになり、この隠れん坊に勝つことが多くなっていった。とくに年少の子どもにとって、これはもはや遊びではなかった。見つけられるとどうなるか、子どもたちは感じ取っていたのである。

エーリはゲッターで私が最後に見た子どもの一人だった。収容所からゲッターへ行くたびに——そのための許可証を私はいっとき持っていた——エーリの姿を探した。彼がいたなら、今のところ危険は差し迫っていないと確信できた。

当時ゲッターではすでに飢餓が蔓延しており、通りには餓死者が転がっていた。ユダヤ人の警官がエーリの両親に、あの子を門に近づかせるなど何度も注意したのだが、エーリは大胆にも再三そこへ出かけていった。ゲッターの門に配置されているドイツ人保安警察官でさえ、あの子には時々食べ物をやっていた。

ある時、私がまたゲッターへ行くと、門の所にエーリはいなかった。しばらくしてから、ようやくあの子を見つけた。エーリは窓際に立ち、小さな手で窓の敷居から何かをなすり取っていた。それからその指を口へ持っていった。近づいて、あの子が何をしていたのかが分ったとき、目に涙があふれ出てきた。誰かが鳥のために撒き散らしていたパンくずを、エーリは拾い集めていたのである。

きっとエーリは、鳥ならゲッターの外でも餌を見つけることができると考えたのだろう。町には思いやりのある人もいるから、お腹をすかせているのがユダヤ人の子なら、怖気づいてしまってパンの一切れすらやれなくても、鳥にならやれるはずだ。

ゲッターの門前には、パンと小麦粉の袋を抱えた女がよく立っていた。彼女たちはゲッターの住民と物々交換をして、服や銀食器や絨毯を手に入れようとしていたのだ。しかし、交換できそうな品物をまだ持っているユダヤ人は、もうほとんどいなかった。

エーリの両親も、パン一個と交換できる物など、きっともう持っていなかったに違いない。

ゲッターでは何人の子どもが、鳥用のパンくずで飢えをしのいだのだろう。しかしパンくずでどれほど生きられるものだろうか。

SS中将カッツマン——悪名高きカッツマン——は、くまなく捜査し続けているにもかかわらず、ゲッターに子どもがまだ残っていることを知っていた。そこで彼の野獣化した脳細胞に、悪魔のような計画が浮かんだ。幼稚園を作るのだ！ 彼はユダヤ人評議会に次のように説明した。「幼稚園を設立しよう。そのための場所と教員を用意してほしい。そうすれば大人が仕事に専念している間、子どもたちの面倒を見ることができる」。

ユダヤ人はいつまでたっても治らない楽道家なものだから、この申し出は人間的な取り扱いの印だと考えた。それどころか、「銃撃禁止令が出た」という話も広まった。「アメリカのラジオが言っていた。これ以上ユダヤ人を殺したら報復措置を取るぞ、とルーズヴェルトがドイツ人を脅かしたんだ。だからドイツ人は、これからはもっと人道的なところを見せようとしてるんだ」と言い出す者も現れた。

また別の話では、「ある国際的委員会がゲッターを訪問する」ことになっていた。ユダヤ人に対するドイツの処遇が人道的であることを宣伝するために、委員会に幼稚園も見せたがっているというのである。

ひまわり (2)

秘密警察の刑事顧問官で白髪のエングルスが、ユダヤ人評議会のメンバーと一緒に現れた。エングルス自身も、幼稚園には明るくて快適な部屋が本当にあると確信していた。彼は「幼稚園に行きたいと思う子どもは、きっとまだたくさんいるだろう」と語り、食料配給を増やすと約束してくれた。実際その後、秘密警察は缶入りのココアと粉ミルクを送ってきたのである。

お腹を空かした子どもを抱えた親たちは、次第に思い切って子どもを幼稚園へ連れて行き始めた。予告されていた赤十字委員会の到来を、人々は待っていた。もちろん、そんな委員会はやって来なかった。その代わり、ある朝SSのトラックが三台やって来て、子どもたちをみな連れて行ってしまった。

夕方、親たちが仕事から帰ってくると、大きな衝撃が走った。

ところが数週間後、私は再びエーリの姿を見かけた。子どもながらの本能が教えたのか、エーリはその朝、家に留まっていたのである。